神様と悪魔さま

相馬正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様と悪魔さま

【Ｎコード】
Ｎ９１３２Ｙ

【作者名】
相馬正

【あらすじ】
教会に暮らすエンティ・ティーは、そこで生活する当たり前のことに疑問を抱く。“神様”って本当にいるの？　そこから彼女の生活は大きく変わる。悪魔の力を頼る彼女を待ち受けていたものは…。
※Ｒ１５は念の為です。　※火曜・金曜７時更新の全４話（１５部予定）です。

第一話　悪魔さま誕生

ここは町はずれにある静かな森に囲まれた小さな小さな教会。

―ここが私の家―

「こらトロン！　顔を洗いなさい！」

いたずらっ子のトロンが、また神父様に叱られてる。
しかも神父様にがんじがらめにされて顔まで真っ赤だ。ジタバタしてみっともなーい。
そのトロンがこっちを見て私を指差した。

「エ、エンティーだって洗ってないよ！」

な！！　このクソガキ！

「トロン！　アンタ何言ってんのよ！」

まさかのお鉢が回ってきた。
ゆっくりとこちらを向く神父様。

「それは本当かい？　エンティー」

低く渋い声が私を問いただす。
ここは教会、嘘をつくことは許されない。しかも、この教会で唯一

大人の神父様は、大人ってことを差し引いても背が高く体格もいい。
その姿で詰め寄る様は鬼神のようだ。
そして…これまで誰も逆らったことはない。

「は…はい」

くぅ…、このまま屈服して顔を洗うの？　本当にそれでいいの“エンティ・ティー”！
洗面台ではトロンが観念して顔を洗っている。なんて惨めな姿。
いやっ、あり得ない！　あり得ないわ！　今二月よ！

顔を洗い終わった他の子達は、とっくに食堂に移動していた。楽しい朝食を前に、私達の悲劇に気付く子は一人もいない。

「さあ、次はエンティーの番だよ」

神父様がニッコリと私に微笑みかける。長身でイケメンという容姿に不釣り合いな“あごヒゲ”の両脇が上がる。既におじい様の域に入ろうかというのに、このスマイルがミサにくる淑女達を癒している。
く…カッコいい神父なんてズルいっ、反則だ。負けちゃ駄目エンティー、“いやだ”って言うのよ…。

「さあ」

「う…るっさい！！」

瞬間、場が凍りついた。
あの神父様に歯向かってしまった…。
トロンの顔が驚きのあまりとんでもなく不細工になっている。イケ

メンの神父様でさえ、呆気にとられ口が半開きになっている。

「エンティー、顔を洗いなさい！」

「い、いやだ！　お水冷たーい」

顔を洗うことくらいなんでもない…、トロンのやつが“ちくった”のは許せないけど、それでも神父様に逆らうなんていつもの私だったら絶対にしない…。

この小さな反抗は、ほんのキッカケにすぎないのかもしれない。

「じゃ、じゃあ神父様のおヒゲはー？　伸ばしちゃって不潔ー」

私は思ってもいないことを口にした。本当はそのヒゲもカッコいいと思っているのに。

「毎日洗っている」

「剃ればいいじゃん」

「刃物は使えないのだよ」

「どうしてー？」

「私は神に仕える身だからだよ」

「…」

なんでこんなバカげた抵抗をしたのか、それがこの誘導尋問の為だと判った。

トロンがハラハラした顔で私達を交互に見つめる。
そうそう、コイツへの仕返しも考えておかないとね。まあ、お楽しみは後に取っておくとして…、それより今は、これから言わんとすることを頭の中で整理しておかないと。この機会を逃したら二度と言えないかもしれない。
でも、それを口にするのはとてもためらわれ、自然と口も重くなる。
本当なら素直に顔を洗えばいい…、反抗したことも謝ればいい…、そういったいつもの自分を全て呑み込んだ…。

―決意を胸に口を開く、それは禁じられた言葉―

「ねえ神父様、“神様”って…本当にいるの？」

第一話　2

普段は開かない神父様の細い目が一瞬だけ開いた。
私の質問「“神様”って…本当にいるの？」は、予想以上に破壊力があったらしい。

「どうしてそんなことを聞くんだい？」

いつと変わらない落ち着いた声…、だけどその目は一点に私を捉(とら)えていた。
神父様、怒ってる？　やっぱり少し恐い…、自分の体が小刻みに震えているのも判る。だけどまだだ…、もう口火は切ってしまったのだから。

「…だって、私にはお母様もお父様もいないから」

神父様は大きな体をしゃがみ込ませて私と同じ目線になった。

「いいかいエンティー。お前がこの世に生を受けていること、それがご両親のいる証しなのだよ。みな例外なく平等に親がいる。ただ、必ずしも産みの親が育ての親とは限らないがね…」

私の抱えた疑念を少しでも拭い去ろうと、神父様は優しく語りかけてくる。言いたいことは判る…理屈だったらいくらでも。

「ほっほ、私がご両親の代わりでは役不足だったかな」

けど…ズルい答えだ。

反射的に首を振り、伏し目がちになった。

神父様は嫌いじゃない。優しいし、背が高いし、髪もヒゲも白いけどハゲてないし、渋くてカッコいいし、とっても好き。言ったことないけど、本当はお父様みたいに思ってる。だけど…、それとこれとは別だ。話をすり替えて説得させられるほど子供じゃない。自分の中に生まれた疑念を…、キチンと見極めるんだ。

「どうして私にはお家がないの？」

神父様の目が再び開いた。解き伏せたつもりの小娘が言い返したからだろうか、何にしても想定外に違いない。

「毎日朝を迎え、食物を賜(たまわ)り、働いて眠りにつく。そうして日々を過ごしているここがお家だよ」

「そうじゃない！　もっと普通の家のこと！」

何を言われようと私は退かない。理屈じゃないんだ。

いつもと違う様子の私に、神父様も少し戸惑っている。

「どうしたというんだいエンティー」

「私…ずっと考えてたんです。教会に住まわしてもらっているのに、いけないことを…」

話が噛み合うはずなんてなかったんだ。

だって私の中での結論は、神様がいるかどうかって疑問じゃなく、既に否定だったのだから。

―ひとつめの禁忌は“神様”の否定―

「私の知ってる神様は人を縛ります。それも都合の良いルールを創ってそれを破ると罪だなんて、私はそこに愛を感じません。無限の愛なんて存在しない。あるのは限られた愛…しかもその言葉は、世界を統べる為に作られた規律を“神様”って存在で刷り込んだだけの紛い物です！」

―そうしてもう一つの禁忌は…“悪魔”の肯定―

「悪魔は人を惑わします。ルールのない“悪行”へと誘う…、人の持つ悪さやズルさ、怖さ、憎しみ、妬み等からくる憎悪は一貫した破壊衝動を生みます。でも、それは誰もが持ってる感情で、時には規律や愛すらも凌ぐ力を発揮する…、そこにこそ真理があるんじゃないですか！」

これにはさすがに神父様が口を挟んだ。

「いったいどうしたというんだエンティー、神の愛は無限だ。人はみな平等なのだよ」

「違う！　さっきも言ったでしょ、無限の愛なんて存在しない！！」

思わず大声を上げていた。頭のネジが弾けてしまったような…そんな感じだった。

この二週間抱え込んでいた思いが溢れ出す。

「じゃあ…、じゃあどうしてカインは病気になったの！？　どうしてもういないの！？　１１歳だよ！　街ではぶくぶく太った大人がたくさん歩いているのに、その人達とカインが平等だって言うの！？　そんなんで…どこに神様がいるって言うんですか！？」

一気に言い切って気が付いた。それらしいご託を延々と並べてみたが、その実、私の言いたかったことはこれだったんだと…。

「…」

神父様にとってもカインのことは痛い傷口だったに違いない。私の卑怯なカードにしばらく黙り込んでしまった。
それからしばらくして、神父様はゆっくりと口を開いた。

「私は…神の教えを伝えはするが、それを信じなさいと言うつもりはない。信仰とはあくまで己の自由だ…。しかし、信じる者には必ず救いが訪れる」

「私が求めてるのは救いじゃない！　自分が信じるに足る信念を求めているだけ！　それは絶対の存在じゃなきゃいけないの！　だから神様ではそれに足らないの！」

「…」

神父様は何も言い返してこない。
そりゃそうよね、信仰自体は人それぞれって神父様が今言ったんだから。

「そもそも私、神様なんていないと思ってる」

「な、なんという事を…、いや…お前が神を信じられないと言うのは、私の不徳のいたすところか…」

と言いつつも、神父様は体をぶるぶる震わせている。
ありゃー、これが一番凄い発言だったのかな…？

「違うの神父様、これは私のワガママで勝手な考えです。だって、神様って人の形してるから…、いかにも他の動物や虫、生き物すべてを見ていない人目線でしょ。だから神様っていうのは人が考え出した言わば偶像なんです」

私の偏った考えは間違っているのかもしれない。でも…このまとまりつつある考えが、今の私の想いに唯一答えてくれる依り代なんだ。

「良い行いは神様、悪い行いは悪魔、どちらも人の持つ感情を何かに言い換えただけ…、だとすれば神様も悪魔も同義ってことです。それなのにどうして“神”には様がついて、“悪魔”には様がつかないの？」

“神様”だけ信仰したり崇めるのはおかしい…。この時の私は国や地域によっては邪神が崇められていることを知らなかったけど、考え方は似ていたのかもしれない。
“悪魔”の方が姿形も多様で、欲望や憎悪という感情から破壊に至る行動まで広義に亘る。どうしてだろう、整理すればするほど神父様の教えとは違ういけない方向にまとまってゆく…。この結論が何をもたらすのかは判らない、だけど、私の中では“悪魔”＞“神様”なんだ。

「神様よりも悪魔の方がずっと絶対的で、私の求める信念にずっと近い存在なんです！」

いつの間にか私だけがずっと喋っていた。まるで私とは別の意思を持った“何か”がそうさせるかのように、それは己の中に留めておくには余りある力で、自ら外に出ることを望んでいるようだった。

「だから敬意を込めて、私だけでも“悪魔さま”って呼んであげるの！」

第一話　3

この時、明らかに私の周りには異変が起こっていた。それは、いわゆる“邪気”と呼ばれる類の気だったんじゃないだろうか。冷たい空気が痛いほどに肌を打つ。

「…ティー、エンティー！　もうやめなさい！　エンティー！」

気が付くと、神父様が私の名前を叫んでいた。
無我夢中で喋っていたせいか、ずっと呼ばれていたのに気が付かなかったみたいだ。いつの間にかトロンの姿もない。
もはや自分の意思なのか、それとも抑え切れない力に動かされているのか、自分自身でもわからないまま、しかし止まらない。勝手に口は動き続ける。

「お願い“悪魔さま”、私に貴方の力を貸してほしいの」

「やめなさいエンティー！！」

辺り一面を薄暗い霧が包み始めた。私の周りは一層深い闇が渦巻き、さらに目に見えるほどの黒いうねりとなって私の目の前にできあがっていった。
ここが闇の中心…。
その渦は吸い込まれそうなほどに深く暗い闇だというのに、とても眩しく感じた。あまりの眩しさに目を細めた時、その先に形あるものが見えてきた。それは今まさに形づいており、徐々に“何か”が実体化されようとしている。人と動物とが入り混じったようなそれは…間違いなく野獣や魔物の類いだった。

そんな有り得ない存在を目の当たりにした自分が抱いたのは、意外にも驚愕や恐怖ではなかった。

「綺麗…」

神父様の反応は私とは真逆だった。『なんとまがまがしい…』と呟き、たじろいで険しい顔を見せている。
まがまがしい？　って何を言ってるんだろう。こんなにも黒く美しい光を放っているというのに。
この時の私の感覚は異常だったのかもしれない。

そして、黒い光が私に語りかけてきた。

『我を喚んだのはお前か』

まさか…本当に？　これが、悪魔…さま？

「そ、そうよ」

『名は？』

「いかん！　名前を交わしてはならん！　な…、なんだ！？」

神父様が駆け寄ってきたが、一層闇が濃くなっている私の近くには来れないようだった。

「私はエンティ・ティー。貴方は？」

『我はたった今誕生した。名はまだない。お前がつけよ』

「え、私が…」

「よせ、いかん！　よすんだエンティー！」

ごめんなさい神父様。エンティーは悪い子です。神父様を一瞥すると、闇に目を向けた。

『さあ』

私が求める絶対的な存在ってなんだろう…無限の愛なんてものがあるのだとすれば、それは…

どんな過ちを犯した人間でさえも神様に許しを請う、そして全ての罪を許す、さらにそれらを背負う。そんな…“善”という行為において絶対的な存在…そう、例えるなら“イエス様”のような…。

今の私は真逆に向かっているかもしれない…けれど、絶対的な力を手に入れたい…、だったら…。

「わかったわ…、じゃあ、アナタの名前は“ノー”よ」

名前を呼ぶと、ぶわっと闇は範囲を広げ、神父様を覆ってしまった。その瞬間、“ノー”と名付けた悪魔さまは実体を現した。黒く輝く魔物。羊のような角を生やし、牛のような顔、あらゆる生き物や植物を合わせたような体…。

「うおっ、くっ、なんということだ、私がついていながら…」

神父様は身動きが取れなくなってしまったようだ。既に部屋中を覆っているこの闇のせい…？

『そうか、我の名は“ノー”か。これで契約は完了した』

「契約？」

『そうだ。お前が我の主（あるじ）となったのだ。さあ、破壊の限りを尽くそうぞ』

「駄目に決まってるでしょ！」

『ヌ…、なんだと？』

「なんということだ…、なんということだ」

神父様は目の前で起こった魔物の誕生に狼狽（うろた）えていたが、すぐに悪魔さまを退治せんと怪しい呪文を唱え始めた。

こんな有り得もしない状況を前に、私はなぜか冷静でいられた。これは私の望んだことなんだ。私自身が願い、そして叶えた…世界を変えた第一歩なんだ。

「やめて神父様！　悪魔なんていないって言ってるでしょ！　神も悪魔も存在しない。ここにいるのは私の想いが実現化した“悪魔さま”よ！」

「まさか！？」

『察しがいいな神父。我を消すことは、エンティ・ティーを消すことと同じだ』

「そういうアナタは察しが悪いわね、ノー」

『ナニ？』

「破壊の限りをつくそう？　ナンセンスもいいところだわ。破壊すべきものは私が決める。この世を…ひっくり返してみせるわ」

暗い部屋の中、その中心に位置する黒く輝く魔物は、薄っすら笑みを浮かべたように見えた。

『ほう…、面白い。我は退屈を望まない。主の考えを聞いてみようではないか』

第一話　4

食堂にいた他の子供達が部屋に戻ってきた。

「神父さまー」

朝食の準備ができたのに、いつまで経っても神父様が食堂に来ないので呼びにきたようだ。

「駄目だ！　来ちゃいかん！」

神父様が必死に止めようとするが、どうやら黒い闇の中では体が動かないようだ。

代わりに私がみんなの方に歩み寄る。

「よせ！　子供達は巻き込まないでくれ！」

神父様は必死の形相だ。

「神父様、大丈夫ですよ。私は何もしません」

「私はお前に言っているのではない！　その後ろにいる悪魔に言っているのだ！」

『ヌゥ…』

ノーに目をやり確認する。

「大丈夫です神父様。彼はとても優秀なの。神父様もさっきの約束をお聞きになったでしょう？」

「なにを…、エンティー！　悪魔との約束を信じるというのか！？」

「“人を信じなさい”、“約束は守りなさい”、教えてくださったのは神父様です」

「“そやつ”は“人”ではない！」

いちいち理屈っぽいなぁ。

「あーもう、るっさい！　ほらみんな、恐くないよ。この子は“ノー”っていうの。仲良くしてね」

「エンティー！」

神父様が動けないのをいいことに、みんなにノーを紹介する。
羊のような角と牛のような顔、さらには周囲を黒い光が包んでいる。
子供でなくとも近寄り難い風貌だ。
それでも私がノーに触れてみせると、始めは怖がっていた子供達も安心したようだ。

「すっげ、すっげ！」

「エンティー！　なに、どうしたのコイツ！？」

いたずらっこのトロンとハーリーがはしゃぎだした。ナナもその後にすぐ続いた。
一番幼いサラと、人一倍臆病なムーアが少し離れて二人寄り添って

いる。

「ほら、サラ、ムーア、おいでっ」

「ね、ねえ、エンティー、その子、噛んだりしない？」

「え？」

なんだ、そういう心配か。“その子”って…。

「あははは、噛まない噛まない。犬じゃないんだから大丈夫よ」

「本当！？」

「あははっ、わーい」

子供達はみんなノーの黒い光には影響を受けないようだ。どうやらこれは聖職者のみに効くのかもしれない。

『エンティー…、なんなんだコイツらは？』

「私の大切な家族！　アナタも家族なんだから、手を出しちゃ駄目よ！」

『なっ、そんなものになった覚えはないぞ』

「私とアナタは契約したんだから家族みたいなものでしょ？　だからみんなとも家族なの！」

『屁理屈だな』

「るっさい！　それはそうと、アナタのその黒い光、なんとかならない？　そのせいで神父様が動けないのよ」

『そうなのか？』

「そうよ。抑えられないの？」

ノーは少しの間じっと集中しているようだった。すると、黒い光が窄(すぼ)まり、それとともにノー自身も消えてしまった。

「えっ？　あれ？　ノー！　ノー！？」

『さわぐな、ここにいる。姿を隠しただけだ』

確かに気配は感じる。

「ビックリしたー。消えちゃったかと思ったじゃない」

『仕方があるまい。神父が動けないのだろう？』

「でも、見えないってのは何か嫌だなぁ、軽いやつないの？　軽〜いの？」

『注文の多い奴だな、これならばどうだ？』

そういってノーは小さなワタアメ状の塊になった。でも角は残ってる。

ぷぷ…まるで黒い羊だ。

ナナとサラの女の子にもすごくウケてるようだ。

「わっ、わわ～、カ～ワイイ～」

『な、なんだ？　おいエンティー、カワイイとはなんだ？』

あーおっかし、ノーが困ってる。ちょっと放っておこう。

「あ、そーだ。神父様どうですか？」

ゆっくりと動きを取り戻した神父様が、私をまじまじと見ている。

「エンティー…、お前は何てことを…」

神父様が十字架を手にまた何か唱えようとしている。

「やめて神父様！　ノーは悪い悪魔なんかじゃない、“悪魔さま”なの！」

「何を言ってるのだエンティー！　悪くない悪魔などいない！　そやつはお前の心に巣食った正真正銘の悪魔じゃ」

『くっくくく、その通り。悪魔とは邪悪な存在だ。我も例外ではない』

薄気味悪い低い声でノーが返事をしたが、そんな脅しは通用しない。それこそ屁理屈だ。

「ノーは黙ってて！　本当に悪いのはこの世の中よ！　だから私がこんな世の中なんて壊してやるの！」

#つづく

第二話　悪魔さまのいる生活

ここは町はずれにある静かな森に囲まれた小さな小さな教会。

―そこには悪魔さまがおりました―

今朝から新しい仲間“ノー”が加わり、一層賑やかになってみんなで楽しく過ごしています。ただ一人、神父様を除いては。

「神父様！　いい加減そのしかめっ面やめてください！　ノーはこの通り大人しくしてます」

黒い羊のような塊が空中にフワフワ浮いている。明らかに異様な光景ではあるが、今のところ実害はない。

「しかし…、神聖なる教会の中に悪魔が…」

「“悪魔さま”です！　それに名前もちゃんとあるんですから、神父様も“ノー”って呼んであげてください！」

「うぬ…」

いくら言っても納得のいかない様子の神父様。
無理もない、この中で神父様だけが唯一ノーに触れることができない。その対象が邪悪な存在でないハズがない。
それもあってか、さっきからずっと見られてる気がする。

まさか懲りずにノーを退治しようと考えてるんじゃ…、そんなの冗談じゃない。それにこのままじゃ落ち着かない。どうにかしないと。

午後になると、いつもの庭掃除が始まった。

「木の実はカゴに入れ、落ち葉や枯れ木は一ヵ所に集めるようにな」

「はーい」

「じゃあ二人一組でペアを組むのだ」

掃除だったらムーアと組むのがいいかな、あ、神父様でもいいなぁ。

「エンティーはノーと組むんだよなー」

トロンの奴が余計な一言を言った。

「そうだな、ノーも教会にいる以上、掃除してもらおうかの。よし、エンティーとノーがペアだ。後は…」

「はあ？　ちょっと…」

「神父様！　俺はハーリーと組む！」

「サラはナナとやるー！」

「そうか、そうか、じゃあムーアは私と一緒じゃな」

な！　ムーア・神父様コンビってズルいっ！　私もそこがいい！
一度決定したペアに異を唱えようとしても既に遅く、みんなは掃除を始め出していた。
仕方なく諦めてノーを見る。改めてまじまじとその姿を観察すると、雨雲から羊の角を生やしたような黒羊…、どうみても掃除なんかしたことないだろう…。いや、モップに見えないこともないか…。

「ねえノー、一応聞いておくけど、“掃除”って知ってる？」

『なんだそれは？』

「ううん…、なんでもない」

やっぱり聞いた私がバカだった…。
しぶしぶ一人で落ち葉を掃く。

「おっと、木の実は拾って今日のお夕飯っと」

『人間とはそんなものを食べるのか？』

「え？　う～ん、普通はそんなに食べないみたい。うちの教会はあまりお金がないから…、だから食べれるものは何でも感謝していただかないと！」

人に聞いておいてノーは何も答えない。
どうせ悪魔さまは木の実を食べないから関心ないんでしょうねぇ…、でも、それじゃ何を食べるのかしら？

「うわぁあああ！　バカやめろよ！」

トロンの声だ。何だかハーリーと悪ふざけしている。

「あいつらは、またサボって！　いったい何やってるのよ」

『なんだエンティー、見えないのか？　何か小さな緑色の生き物に怯えているようだが…』

緑色…まさか？

はっはーん…、トロンのやつ、そっか芋虫が苦手なのか。

『己より何十倍も小さい生き物に怯えるとは、人間とはそんなにか弱い生き物なのか？』

「違う、違う、苦手ってやつよ。アナタもナナとかサラとかに囲まれて困ってたじゃない」

『な！　べ、別に困ってなど…。う、うむ、しかし何となく判ったぞ』

へぇ…、悪魔さまってのも学習するんだねぇ。そりゃそうか、生まれたてだもんね。

それにしても…、いいこと思いついちゃった。

『どうしたエンティー、随分ご機嫌だな？』

「ふふーん、ちょっとね」

だけどこっちの方は…、後ろをちらっと見て溜め息を吐く。

さっきから神父様がコソコソこちらを覗いてるのがどうにも落ち着かない。

多分、ノーを監視してるんだけど、もしも道行く人が見たら変態にしか見えないでしょうね。

「まあ、私ってば可愛いから余計にねぇ…、でも、神父様がロリコンだったらどうしよう」

ひゃ～ヤバイ、さほど嫌でもない私もヤバイ！　神父様と私じゃ四、五十歳は違うわよね？　それじゃ犯罪だっての！…って、いけない。狙われてるのは私じゃなくてノーなのよね。油断してたら何か仕掛けてくるかもしれない。
私だってまだノーのことよく解ってないのに、こうも見張られてたら色々確認することもできやしない。

今解ってることといえば…
・神父様を始め、多分、聖職者の人はノーの闇にマイナスの影響を受ける。
・ノーには触れることができるし、逆にノーが私や物に触れることもできる。
・ノーは姿を消すことができる。色々な姿に変身もできるみたいだけど…。
・それと生まれたばかりのせいか、ノーってそんなに頭は良くなさそう。きっと私の方が頭いいわ。
・最後に、ノーは私からそう遠くへは離れられない。それは一心同体ってことなのかしら？

うーん、たいして目新しいことがないなぁ…、そうだ！　いっそのこと街に出るってのはどうかしら？
それは…神父様が許してくれるはずないか…、でも神様を信じていない私と悪魔さまのノーがこの教会に残っていること自体、本当は許されないことなのかもしれない。それに、私は世の中を変えてみ

せるって言ったのに、たいして外の世界を知らないんじゃお話にならないわ。
ここは何としても神父様を説得しないと！

第二話　2

今日もあっという間に一日が過ぎようとしていた。
夕暮れとともに、みんなでロウソクに火をつける。柔らかな灯りが食卓を照らす。
いつものように神様に祈りを捧げ、楽しく食事をして、神父様のありがた～いお話を聞いて…、それがこれから先も続くはずだった。
少なくとも他の子供達はみな、それを疑うことすらなかっただろう。
この時点ではまだ、私は神父様に街へ行く話を切り出してはいなかった。

「ねえエンティー、ノーって何食べるの？」

人一倍臆病だったムーアが、今では一番ノーになついている。

「え？　ああ、そういえば何だろう…、ねえどうなの、ノー？」

『それは勿論、人間が抱く邪悪な…』

ボゴン！

『も〝っ…！』

ノーを突き飛ばし、適当な設定をつける。

「思い出した！　ノーは納豆を食べるんだった。残念～、ここにはないな～」

「納豆ってな～に？」

ムーアが首を傾げている。

知らないっての！　適当に外国の食べ物言っただけなんだから…、って言っても判んないよね。

「あ、悪魔さまの食べ物じゃないかしら？」

「ふ～ん」

『エンティー、貴様何をする！』

急にどついたせいでノーが怒っている。

「今のはノーが悪いんでしょ！」

『何を！』

「やめてよ！　ほらノー、僕のレタス半分あげるから」

『…』

「…」

こういう時、無垢な存在っていうのはありがたい。

無言で差し出されたレタスを食べるノーは、本当に黒い羊にしか見

えない。ムーアがニコニコとノーを見ているので、ノーも黙って食べるしかないようだ。

「うわぁあああ！」

急に大声を上げて席を立ったのは、あのいたずらっ子のトロンだ。

「どうしたトロン！」

神父様がすぐに駆け寄る。

「ス、スープの中に芋虫が！」

「うぷぷっ…、う、あーっはっはっはっはっ！　…はっ」

しまった！　あまりにトロンの驚きっぷりがおかしかったから、つい笑ってしまった。しれっと仕返しするハズだったのに…。

「エンティー！！」

トロンがまた顔を赤くして私を睨み付けてくる。

「ベー、アンタが悪いんじゃない！」

「トロン、やっちまえよ！」

ハーリーがトロン側につく。

「エンティー、トロンなんかやっつけちゃえ！」

ナナも私を煽(あお)る。
サラとムーアは神父様の後ろに隠れ、恐る恐る顔を覗かせる。まさに恒例の騒動が始まるハズだった…、神父様が口を挟むまでは。
「エンティー…、子供同士のケンカはどうするんだったかな？」
「神父様は黙ってて！　子供同士のケンカに大人は口出ししないんでしょ！」
何よ、自分で教えた決まり事に横から口挟んで！
「そうだ判ってるならいい、一番の年長者がその場を治めるのだからな」
「だから、それはカイ…」
思わず口を閉じてしまった。
“カイ”…、私はなんて言おうとしたの？
一気にみんな鎮まり返った。
『なんだ、どうしたエンティー？　急に静かになったようだが』
「るっさい！」
「エンティー、今はお前が一番の年長なんだ。みんなの手本にならないといけないのだぞ」
「るっさい！」

トロンは俯き、ハーリーもナナも茶化すのを止めた。
一番小さいサラが何かを思い出したように泣き始めてしまった。

「うぇええ、カイーン…」

そうだった、サラは私と一緒によくカインの看病をしてくれた。

「るさい…」

駄目、頭の中にカインとの想い出が勝手に浮かんでくる…。
サラの泣き声に釣られてか、ムーアも他の子達も泣き始めてしまった。

「うえええええーん」

「るっさい！　るっさい、るっさ…」

駄目だ、泣きそうだ…。
その場から逃げ出したくなってドアに手をかけた時、腕を強く引っ張られた。

「神父様…」

「どこに行くんだエンティー、まだこの場は治まっておらぬぞ」

「放して！　街に行くの！」

「何だと！？」

「街に行って、この悲しみの元をなくしてくるの！　私が一番年長

さんだから…！」

「ならん！」

「どうして！」

神父様は怒ってる。お顔が恐いし、腕からも凄い力が伝わってくる。私が悪い子だから？　でも、これだけは絶対にゆずれない。朝の話の続き…、カインは…、堪(こら)えていたのに涙が止まらない。

「ねえ、神父様！　じゃあ答えて！　カインは幸せだったと思う！？」

「…」

「私に“カインは幸せだった”って、ちゃんと説明できる！？　できないんでしょ！　だから私がこの目で確かめてくるの！　街に行って他の家の子達と比べてくる！　本当にカインは幸せだったかどうかって…」

神父様は何も言わずにただ唇を強く噛んでいるようだった。一瞬力の緩んだ隙をついて私は掴まれていた腕を引き抜いた。

「だから…！　もしもこの世界の方が間違ってるんだとしたら、その元凶を私が壊してやる！」

バターン

強くドアを開くと真っ暗な森の中へ駆け出していた。

半ば喧嘩別れのような感じで飛び出してしまった。神父様のあの細い目…とても悲しげで、それがさっきから脳裏を離れない。

「こんな風に街に出るつもりじゃなかったのに…」

『なんだ？　街に行けるというのにうれしくないのか？』

「るっさい！」

涙で前がよく見えないけど、ただただ遠くに滲んで見える街の灯りを頼りに走り続けた。

＃つづく

第三話　悪魔さま街へ行く

教会を飛び出してどれくらい経っただろうか。辺りは既に真っ暗で何も見えず、道だってないに等しかった。頼りは遠くに見える街の灯りだけだった。
思わず熱くなって飛び出した勢いも、森を走り抜けて暖まった体も、この寒空の下ではすぐに冷めてしまった。
その体の冷えと共に足取りは重くなり、暗闇が作る孤独がさらに追い打ちをかけた。

「どうしてあんなこと…」

後悔が押し寄せる。
みんなにカインのことを思い出させ、沈ませてしまった。それに神父様のあんな悲しそうな目…。
後ろ髪を引かれ、前に進む力が弱くなる。

『おいエンティー、あれが街か？』

ノーに言われて顔をあげる。
そっか、俯いて歩いていたから気が付かなかったんだ。
いつの間にか、街が目の前のところまで辿り着いていた。

「すごい…、夜なのにこんなに明るい」

その眩いばかりの灯りは、今の沈んだ私の心を少しだけ救ってくれた。
引き寄せられるまま街に入る。

前に神父様に連れられて来た昼間の雰囲気とは全く違う…、始めて訪れた夜の街に少し興奮気味になった。

「どうなってるの？　夜なのになんでこんなに眩しいの？」

それに、とっても綺麗…。

『なんだエンティー、電気も知らないのか？』

急にノーに話し掛けられハッとする。浮遊している黒い羊…。

「ちょ、ちょっと駄目じゃないノー！　早く姿を消して！」

『なんだ、駄目なのか』

「当たり前でしょ！　ほら早く！」

急いで周りを見回す。

大丈夫、まだ誰にも見られてない…わよね？

「ねぇノー、さっきの“電気”ってなぁに？」

『火に変わるエネルギーの一つだ。スイッチを入れるだけでいつでも灯りが点く』

「いつでも！？　すっごい！」

『いいや…、全然すごくないのだが。この時代、電気がないあの教会の方がどうかしている』

「そうなの？」

パパパァーン

「うわぁあああっ！」

道の真ん中を大きな箱が走り抜けた。

「な、な、な…！」

『ただの自動車だ。なんだ、あれも知らないのか』

「るっさい！　一回だけ見たことあるもん。夜だったからビックリしただけ！」

『一回…』

それにしても凄い。夜なのに、どこもかしこも輝いてる。
ここに来るまでは何にも…道すら見えなかったのに、ここには何でもある。昼間と変わらないくらい何でも見える。
家も道も人も、当たり前のものまでが、夜に見るせいか、全てが新鮮で輝いて映った。

世界はこんなにも輝いていたんだ！

キュルルルル…

『なんだ、何の音だ？』

「る、るっさい！」

そういえばご飯の途中で抜け出してきたんだった。それに、いつもならもう寝てる時間だ…。

お腹空いたな…。

空腹になると、そこかしこからいい匂いがしていることに気が付いた。

「ママー、パン食べたいパンー」

パン！？　このいい匂いの元はパンか。

っていうか、こんな時間に子供がいるなんて…、注意して見ればそこにもあそこにも子供がいる。

夜でも普通に子供がいるから私が一人で歩いていても珍しく思われなかったのね。

さっきの子を見るとパンを片手に満面の笑みを浮かべている。

余計にお腹が空いてきた。

『どうした、エンティーも食べたいのだろう？』

「でも、私はお金持ってないから…」

少しすると、今度は太った子供がパン屋のおじさんに話かけていた。

「おじさんパンちょうだい！」

「こら！　今日はパン買いませんよ」

あの子の母親か。

「あはは、いいですよ、いつもお世話になってますから。今日はサービスです」

「ありがとうー！」

ええっ！？　もらえるの？

『どうした、エンティーももらってきたらどうだ？』

そんなことがあり得るのか？　街は私の知らないことでいっぱいとはいえ…、でも、いつまでも空腹ってわけにも…。

誘惑に勝てずに、恐る恐るパン屋に歩み寄る。

「おじさん…、私もパン…、食べたい…」

「おや、カワイイお嬢ちゃんだね。しょうがない、サービスだよ」

そういっておじさんはパンをひとつくれた。

「ええっ、ホントに！？」

「あっはっは、いいからいいから！　その代り、おいしかったら今度は家族で買いに来ておくれよ」

「あ、ありがとうっ！」

パンを受け取ると、いい匂いが広がった。それに温かい。
街って本当にすごい。
すぐにパンを頬張った。

「おいしい！　こんなにおいしいパンは始めて！」

『そうか、それは良かったな』

世界はこんなにも幸せで満ちていたんだ！

「コラ！　帰れこのクソガキ！」

なんだろう？　さっきのパン屋のおじさんの声だ。
振り向くと子供がおじさんと言い合っている。

「一個くらいいいじゃんかケチ！　さっきの子だってもらってたじゃないか！」

「しっしっ！　お前らにやるパンはないんだ！　商売の邪魔だ！」

え？　なんで？　なんであの子はもらえないの？

『それはお金がないからだろう』

「そんな、私だって、その前の子だって」

『簡単なことだ、それは次に来る時はパンを買ってくれるからだろう。先行投資ってやつだ』

「せんこうとう…何？　でも、それだったらあの子だって」

『それはない、あの恰好で判るだろう？　パンを買うことはおろか、水でさえ手に入れられない』

「どういうこと…？」

『街は綺麗か？　隅々まで見たか？』

さっきから見てるじゃない。街はこんなに綺麗で…、隅々まで…、あれ…？

どうしてさっきまで気が付かなかったんだろう…。道の端や建物の隙間には、座り込む痩せて恰好もみすぼらしい人達がいた。それに引き替え、道の真ん中を歩いているのはみんな恰幅のいい人達ばかり…。

例の自動車の中から出てきた人達も、乗りこむ人達も裕福な恰好をしていた。

街中の明るいきらびやかな家の中に入っていくのも、同じような人達だけだ…。

「じゃあ、さっきの子供はどこに住んでいるの？」

『さあな、家があればいいんだがな』

「そんなこと…まさか？　そうだ、教会！　そうよこの街にだって教会があるはずよね！　そこへ行けばきっと」

『行ってどうする？』

「るっさい！　とっとと教会探しなさいよ！」

教会…、一番背の高いところに十字架が見えるはずだ…、あった。教会に行けばきっと…。そこへ行けば救いがあるはず、なのに…それを否定しようとする自分がいる。戸惑いながらも教会へ急いだ。

第三話　2

街の教会で待っていたものは、さっきと変わらない光景だった。
入り口で追い返されている親子…、やはり見た目はみすぼらしいが、
でもここは教会のはずなのに…。
しかも追い返しているのは、教会の神父のようだ…。
それでいて、少しでもいい恰好をした人は教会の中へ招いている。

「信じられない…」

あんな神父が何の神を語るっていうの…？

「どういうこと…ノー」

『おかしな奴だ。人間社会のことを悪魔に聞くなんて』

「るっさい！　知ってるんなら勿体ぶってないで、早く教えて！」

『あれが人間特有の階級ってやつだろう』

階級…？　だって王様とか官僚とかじゃないよ？　こんな街の中で
優劣があるの？

『人間ってのは、自分より下に属す者がいると安心するらしいな』

そんなの…！　神様や神父様の教えと違う…。
教会で感じていた疑問…、街で感じた矛盾…、これが世の中のルー
ルだっていうの…？

「じゃあ、あの人達はどこに行けばいいの？　食べ物は？　寝る所は？　祈りをささげる場所は？」

『ふん、ならば尾けてみるといい』

ノーに言われて、さっき追い返された親子の後を尾けていった。
なぜか意識がぼんやりする…、これまでの自分の常識がこの数時間でどんどんくずされてしまったせいだろうか…。
親子が着いた先はとても家とはいえないような壊れかけた建物…いや廃屋だった。そこはところどころ崩れており、板やレンガで穴を塞いだ跡がいくつもあった。隙間から中を覗くと、さっきの親子の他にもたくさんの人が、中には老人もいた。子供だって沢山いるのに、みな一様に元気がなく笑顔すらない。

「こんなの…おかしい…」

神父様は言っていた…、貧しくともみんな明るく気持ちを豊かに暮らそうと。
確かに教会の暮らしは貧しかったけど、みんなで楽しく過ごせていた。
だけど、目の前のここは…、この状況でどうやって明るく振舞えと、気持ちを豊かに暮らそうっていうの？

「うっ…、なんかすごい臭いがする…」

『やめておけ、見ない方がいいぞ』

見ない方がいいってことは判ってる…、この臭いは腐敗臭だ。でも…、目を背けちゃいけない気がする。

建物の中の隅に、ござのようなもので覆い隠した塊があった。

「うっぷ…」

『だから言っただろう』

たまらずさっきのパンを戻してしまった。
人…だった…。
なんなの…コレは…。
そこにはまさに“不幸”が溢れていた。

ここの人達は教会にも入れてもらえない…、それでも神様に祈りを捧げている。その神様は一体何をしてくれるの？
裕福な家の子供はたいしたお祈りもせずに暖かい家とご飯に恵まれてるのに…。

怒りでもない、悲しみでもない、だけど…訳も判らず涙が溢れてきた。
この世界は…、こんなのって変だ…、何かが根本的に間違ってる。
今日見た数々の疑問と矛盾…、そこで裁くべきものが見えた気がした。

「ノー…、なんとなくだけど少し見えてきたわ」

『ほう、随分と時間を要したな。我を落胆させないでくれよ』

「祈りを捧げているのは、いつだって我慢を強いられている者ばかり…、そんなのおかしい。この世の中をおかしくしているのは…“神の教え”なのかもしれない。ううん、それだけじゃない、神の代理と称する者は全て偽りよ」

でも、一つだけ確認しておかないと。このどさくさで曖昧になるところだった。

「ねぇノー、パン屋でアナタ何かしたでしょ？」

私の恰好だってそれほど褒められたものじゃない。パンをもらえなかった子とそんなに変わるとも思えない。

『なかなか鋭くなったなエンティー、ご明察だ。気に障ったか？』

「ううん、いい勉強になったわ」

あれがなければ私がここに来ることもなかったんだ。
ノー…、なんとなく一緒にいるのが当たり前になってたけど、まだその能力については何も知らない…。
でも、やるべきことは見つかった。

「この世の中に“神様”なんていない！　だから“神の教え”なんていらない！」

『ほう、思いの外、面白い結論を見つけたではないか。ではどうするのだ？』

「教会の十字架やマリア像を破壊するの。本当に神様がいるのなら壊せないはずよね？　もし壊せたとしたら、そこにいる子供たちはもう神様を信じる必要はないでしょう」

『はっはっはっ！　確かにな。だがどうする？　教会の神父が邪魔立てするかもしれんぞ？』

「教会を守れないなら、そんな神父もいらないわ」

『そうか、では本当に神とやらが現れたらどうする？　我のが強ければ結果は同じだぞ。良いのか闘っても？』

「ええ、構わないわ。力がなければ、みんなを守ってるとは言えない。そんな神様はいらない」

『くくく…、面白い。忘れるなよその言葉』

第三話　3

それから数日の間、私とノーは街にある教会を順番に回って十字架やマリア像を壊していった。
一週間もしないうちに街では教会を荒らす盗賊の噂が広がり、深夜は外を出歩かないようにと御布令(おふれ)まで出された。
最近では夜中の教会に、警備員が配置されていることも珍しくない。

「ノー、出番よ」

ノーが実体を現す。すると、例の黒い邪気が広がり、警備員はそれを避けるように向こうへ行ってしまった。
聖職者ではない一般の人には、どうやら人払い的な効果があるようだ。それが解った今では、こうやって多用している。

『まわりくどい…、あんな見張りなど蹴散らしてしまえばいいのだ』

「るっさいってーの」

警備員が見ていない隙をついて教会の中へ入る。中に入ってしまえばこっちのものだ。

『待て、誰かいるぞ』

そこには一人の少女がいた。

「誰っ！？」

振り向いた少女の目にはとめどない涙が溢れていた。一切拭った形跡もない、ただただ流れる涙。
そして少女の足元にはおそらく息を引き取ったであろう少年が横たわっていた。

少女は私を見るなり駆け寄ってきた。

「助けて！　お願いします！」

「え、何？」

「貴女は神様の使いの方でしょう！？」

「な、違う！」

「違わないわ！　だって後ろに神様がおられるじゃないですか！」

ノーのこと…？　この黒く怪しく光る奴が神様…？
ふと何かがダブって見えた。
この子は…私だ。絶望に覆われ、藁にもすがろうとする、あの時の私と同じ…。

教えてあげないと、神様なんていないって…。

「ケホッ」

！？

まだ息がある！？

「ああっ、大丈夫リューズ！？　待ってて、今、神様がお見えになったのよ！　だから頑張って！」

ドクン…

なんだ？　心臓の鼓動が強く…。

神様なんていない！　この子に教えてあげなきゃ…。

『どうしたエンティー？　心が乱れているぞ、さあ早くあの十字架を破壊してしまおう』

「え、ええ」

「ケホッ！　ゲホゲホ！」

「神様！　早く！　リューズの発作が酷くなってきた！」

何を言ってるのこの子は？　私達の会話が聞こえなかったの？

少年は顔を蒼白にしつつも目は力強く私を見ていた。口元が小さく動き、消えるように小さい声で呟いている。

「ねぇ、ノー？　あの少年が何て言ったか聞こえた？」

『ああ、意味は判らんが、我には聞こえたぞ』

「教えて」

この少年は私を見ている。私に話しているんだ。

『“コノコハツレテイカナイデ”と、言っていたが、これで判るか

？』

―この子は連れて行かないで―

少年にはノーが見た目通りの悪魔に見えてるんだ…。
おそらくは死期の近い自分を連れにきた死神とでも思ってるんだろう。
自分の命がまさに消えゆくその瞬間、この少年が心配しているのは自分じゃなく…この少女のこと…。

「なんで…」

『どうしたエンティー？』

私の中にカインとの想い出が蘇る。
カインが衰弱しきっていた頃…、私がご飯とお水を持っていった時、いつもカインが言っていた言葉。

“エンティーはもう食べたの？　僕はもうお腹いっぱいだから…これも食べて”

あの時は、何を言ってるんだろうって思ってた…、カインは…、私のことを心配していたんだ。
目頭が熱い。目から溢れ出る涙に呼応するように、頭の中にはカインが元気だった頃の楽しい想い出が溢れて止まらなかった。
想い出の中にいるカインは、そこにいるカインは…、間違いなく幸せに見えた。

「わあああああああああっ！！」

『エンティー！　早く壊せ！　あの少女に教えてやるのだろう？』

壊す？　何を？　教える？　誰が？

これが…神父様の言っていた“救い”なの…？

違う、神様なんていないって…、否定したはずなのに…、駄目だ、

何かが壊れて…る…、あ、あ、あああ！　頭が、頭が痛…い…！

『…ティー、エンティー』

！？

ノーとは別の声が聞こえる…？

『僕は最後まで幸せだった。君にとって…僕と過ごした時間は幸せ

じゃなかったの？』

「ち、がぁう…！」

なんだ…コレ…、頭が割れそう…っ！

『エンティー、エンティー』

なっ…！　なんで…、この声ぇ…え！

「カイン！！」

間違いない、カインの声だ！

『貴様！　どこから現れた！？』

ノーが一瞬戸惑った。まさかノーと同じ…！？　でもどこに？　姿が見えない。

『エンティー、あの子を救ってあげて…。あの子は君と同じだ…』

「カイン…、どこ？　どこにいるの？」

『貴様…勝手に…うおっ！』

すごい…、ノーが気圧（けお）されてる。

『あの子に君と同じ想いをさせちゃいけない。救ってあげて』

「カイン！　何？　どういうこと？　救うって、どうやって？　あの少年はもう助からないのに！」

『少年はもう幸福に満ちているよ。好きな子にあれだけ想われているのだから…。だから今度はあの女の子を救ってあげてほしい』

「判らない！　判らないよ！　どうすればいいの！？」

『教えてあげて…。少年の手をとって、いっぱい話しかけて、穏やかに看取ってあげて…。君が僕にそうしてくれたように』

「でも、でも、それじゃあ救われないよ！　だって彼は戻ってこないじゃない！」

『エンティー…、僕は幸せだったよ。君がずっといてくれたから…。でも僕は君を幸せにしてあげることができなかった。それだけが心

残りなんだ』

そんなこと…ない…。

『ぐ…がぁっ、エンティー、やめろ…、やめろ！』

ノーが苦しんでいる。

「そんなことないっ、カイン！　私もカインと一緒に過ごせて幸せだった…！」

『ガァアア！』

ノーが絶叫とともに沈黙した。

…そうか、これが神様の教え…。“死”は平等に訪れる。でも悲しみだけじゃない。その想いは形を変えて受け継がれてゆく。

「…けて！　助けて！」

急に我に返った。少女はずっと叫び続けていた。年端は私と変わらない。

彼女の手を取り落ち着かせた。

「座って…」

「う、うぇ、助けて、リューズを助けてよぅ…」

「ごめんね、私には何もできないの…。だけど、貴女だけは彼にしてあげられることがあるの」

「私…だけ？」

「そう、彼の顔を見てあげて、そして手をとって…」

結局…、私が今この子に言ってることは、あの時、神父様に教わったことと同じだ…。

少女の手を持ち、彼の手に触れさせる。
教会の高い窓から光が射し込み、少年の顔を照らした。

「笑った…」

「そう、貴女がいることで、彼は幸せになれるの。先に旅立ってしまうけれど…それはとても悲しいけれど、彼はこんなにも豊かで幸せな顔をしている…。貴女のおかげよ、だから貴女も微笑みかけてあげて」

「私…」

少女は必死に涙をこらえ、それでも精一杯の微笑みを少年に向けている。
もう大丈夫…。
落ち着いたのを見計らい、静かにその場を後にした。

教会を出るとすぐに、沈黙しきったはずのノーが現れた。

『エンティー、貴様！　我との契りを忘れたか！？　許さぬぞ！』

「勘違いしないでノー」

『なに？』

少し感傷に浸ったのは本当、でも…

「あのままあそこにいたら、勢い余って全てを破壊してしまいそうだったから表に出たのよ」

『どういうことだ？』

「神様だか何だか知らないけど、カインになりすました奴を私は許さない！　出てきなさいっ！」

ガサッ

暗い木々の間から人影が近付いてくる。

「ははは―、やるなぁエンティー。どこで判った？」

なっ、なんで私の名前！？

現れたのは小柄な男、歳は二十歳くらいだろうか？

「アンタは誰っ？」

長い髪に装飾品の数々…？　胸にあるのは十字架の銀飾り…、いや…あれって正十字？

もしかして、この教会の神父…？　ううん、有り得ない！　神父というには…そもそも聖職者というには不真面目な恰好過ぎる。

「釣れないねぇ。同じ教派の仲間に対して、随分な挨拶じゃないか？」

「同じ“教派”って何よ！？」

「たはーっ、んなことも知らねぇのかよ」

男は参ったと頭を押さえている。

「俺の名前は“ノルマン”。ま、俺もお前も“地球再生教”の一員なんだ、仲良くやろーぜ」

第三話　4

「地球再生教！？」

『誰だコイツはエンティー？』

「知らないわよっ！」

「おっと、そいつが噂の悪魔くんか？」

体が自然に身構える。

コイツはノーの存在を知っている…。

でも、ノーの黒いオーラに気圧されていない。聖職者じゃあないの？

「アンタ何者？」

男は両手を挙げて闘う気はないと意思表示をしているが、ゆっくりと近付いてくる。

「俺はエンティーを迎えにきたんだ」

『騙されるなよエンティー、コイツはやる気満々のようだぞ』

！？

男が急に飛び掛かってきた。

「バレてちゃしょうがねえ！」

「きゃっ！」

『ふんっ』

間一髪、ノーがガードを作って男を弾いた。
危なかった、丸腰だからつい油断してしまった。

「何するの、この卑怯者！」

「かーっ、何言ってんだ。いっちょ前に“きゃっ”とか、“卑怯者”とか、言ってよ！　その悪魔くんを動かしているのはエンティー、お前自身の“力”なんだぜ！　手段を選んでたらこっちがやられちまうよ」

「何言ってるの！？　それよりアンタね！　さっきカインになりすましたのは？」

男は一瞬考えたが、人差し指を振ってみせた。

「そいつはちぃーっと違ぇなぁ。俺は頭の中で考えただけ…、だからエンティー、全部お前自身の力がそうさせたんだぜ」

「嘘よ！！　アンタは絶対ゆるさない！」

「…しょうがねーなー」

男はそう言うと、コートの内側から何かを取り出した。それは一度も見たことないけど何だか判った。多分…拳銃ってやつだ。

「とにかくお前を連れてかないといけないんでね、悪く思うなよ」
銃口が自分に向けられている。
『どうしたエンティー、体が強張ってるぞ』
「るっさい！」
言われなくても判ってる。勝手に体が恐がってるんだ、どうしようもない。
「さあ、おとなしく俺について来るんだ」
そう言って男は銃口を私に向けたまま近付いて来る。
『何をしているエンティー、相手が神だろうと闘って良いと言ったお前が、たかが神父一人に何を構えている？』
「るっさい！　この状況で何をどうしろっていうのよ！」
『ふぅ、仕方あるまい、今回だけは我が少しリードしてやろう』
ノー？
何をする気？　相手は拳銃を持ってるのよ？
「おわっ！」
男は突然足を止め、おかしな動きを始めた。
え？　え？　どうしたっていうの！？

「な、テメェ！　エンティー何しやがった！？」
男は拳銃を持った手を上に向け…、いや自分自身に向けた！？
何？　どうなってるの？
「やめろ、コラ！」
え、ちょっと…まさか、これ…ノーが？　ちょっ…駄目！
「やめてぇええ！！」
ダーン…ンン……
夜の林に銃声が鳴り響く。
遅かった…、頭の中でまださっきの銃声がこだましている。
思わず瞑ってしまった目を恐る恐る開く。
「ってぇーえ！！！」
ホッ
男は生きていた。
どうやら耳の近くで拳銃を発砲したらしい。耳を押さえ、顔は苦痛で歪んでいる。
「ぐあああああー！！」
もしかして鼓膜が破けたんじゃないだろうか。

とにかくこの男が持っている拳銃、あれは危ない！　なんとかしないと…。

「く、くあぁ、くそぉ、ああぁ…なんだぁあ！？」

男は妙な呻(うめ)き声を上げながら、拳銃の銃口の方をしっかりと握って、私に差し出してきた。

慌ててそれを奪い取る。

「重っ！」

何、この人どうしちゃったの？　なんで私にこれを？　まさかこれもノーの力…、意思を操れる…の？

『ほう…、判ってきたじゃないか』

「え？」

『今のは我を通して、お前があの男を操作したのだぞ』

ええ！？

私はただ、拳銃をどうにかしないと…って思っただけなのに、それだけでコントロールできるの？

『なかなか飲み込みが早いな』

そんなのってあり…？　なんだってできちゃうじゃない！？

「くっそ、いてて…、手加減ってもんを知らねーのか！　だからガキの相手はやだって言ったんだ！　わざわざヤコブセン教のいない

時を狙ったってのに…」

“ヤコブセン”…！？　神父様の名前！

「アンタ何者！？　なんで神父様を知ってるの！？」

奪った拳銃を男に向ける。

「ほら、早く全部吐きなさい！」

「うわっ！　それ本物だぞ、こっち向けんな！　それに全部吐けって…、せめて質問くらいしろ！」

「るっさい、あっ！」

ダーンン…！

「きゃあっ！」

思わず指に力が入り、トリガーを引いてしまった。あまりの反動に体がよろける。

「るっさぁー！　何この衝撃！？」

『エンティー…、お前はそれを使わない方がいいぞ』

「そ、そうね」

弾は男の股下を抜け、地面にめり込んだらしい。そこから煙りが上がっている。
男の顔は青ざめ、口をパクパクしていたが、声になっていなかった。
大きく外したつもりだったのだが…、ま、まあ、当たらなかったんだから結果オーライよね。

「あら失礼。とにかく知ってること何でもいいからサクッと話しなさい。今度は本気よ！」

男は額の汗を拭うと、一呼吸おいて話し始めた。

“今度は本気”って…今さら冗談きついぜ…。俺はノルマン…」

ガチャ

「それはさっきも聞いた」

「うわぁああ！　いちいち銃口を向けるな！」

「るっさい！　なんでアンタが神父様の名前を知ってるの！？　早く言いなさい！」

「なんでって…そりゃあ、ヤコブセン教っていや地球再生教の大幹部だぜ。信徒で知らない奴はいねぇーさ」

「神父様が教団の人！？　アンタ、そういえば私もその何たら教だって言ったわよね？」

「ああ、間違いねぇぜ」
「私は捨て子だって聞いてたのに…」
「あー、ま、そういう設定なんじゃねーの？　あの方はお前を教団からさらった訳だしな」
「嘘よ！」
「嘘言ってどーなる、だから俺がこうやって迎えに来てんじゃねーか」
これが迎えにきたって態度？
それに…
「誰がそんなこと頼んだのよ！」
「くっはは、誰がってそりゃ…、言っていーのか？」
男は皮肉めいた笑みを浮かべている。どうせロクな答えじゃない。
「なに勿体ぶってんのよ」
「カインだよ」
！？
「アンタ…！　冗談もほどほどにしときなさいよ」
思わず高圧的になる。

「おっと、降参だよ降参」
男は両手を挙げた。そういえばコイツ、始めに現れた時もこうやって油断を誘って…
「その手は食わないわよ」
警戒心が働き再び拳銃を構える。
「待った待った！　お前が知ってること何でもいいから言えって言ったんだろ！」
「嘘を言えなんて言ってないわ」
「だーから、さっきからいっこも嘘は言ってねーよ！　お前は知らないかもしんねーけど、カインだって教団の信徒なんだぜ」
「どういうこと？」
「カインもお前を連れ戻しに行ったんだが…、例の病気が再発しちまったらしいな、どちらにせよ荷が重かったってことだ」
「何を言ってるの…、再発？」
「あん？　アイツ、薬飲まなかったんだろ？　それで病気を再発させて…」
違う！

「飲まなかったんじゃない！　薬がもうなくなって…」
「何言ってんだ。薬だったら切れないよう教団から定期的に渡してたハズだぜ」
え？　何？　どういうこと？
だってカインは薬がなくて、それで病気が悪化して…、それなのに…、薬があったって…？
「はーん、そうか、ヤコブセン教が懐に入れたか？　結構いい値で売れるからなアレは」
神父様が…！？
男は薄ら笑いを浮かべている。いけない…。
「誰がアンタの言うことなんか信じるもんですか！」
だけど男はだいぶ疲弊（ひへい）していて、ここでそんな嘘をつくとも思えない…、でも苦し紛れってのもあるかもしれない。
「別に俺を信じる信じないは自由さ、自分の目で確かめりゃいい…」
「るっさい！　言われなくたってそうするわ！」
『おい、コイツはどうするんだ？』
男にはもう反撃する力はない。それに怪我をしたのは鼓膜だけみたいだし、このくらいなら一人でも帰れるはず。
「ほっときゃいいわ。行くわよノー」

#つづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9132y/

神様と悪魔さま

2012年1月2日07時46分発行